



# 元気っ子

No 322 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

初夏の陽気が漂い、子どもたちも汗をかきながら園庭を走り回る姿が見られるようになりました。熱中症に十分気を付けながら、子どもたちの「やりたい！」を保障できる環境を意識しながら保育を展開して参ります。

らいおん組の「お御堂参拝」ですが、4月は「蜘蛛の糸」、5月は「三尺三寸箸」のお話をさせて頂きました。どちらも仏教にまつわるお話ですが、ご家庭でそのお話を「何となく」でもお伝えできたお子さんはどのくらいいましたでしょうか。ある保護者の方からはお子さんが、ずっとそのお話をしてくれていたと教えて下さいました。年長児になり、少しずつ「聴く力」「伝える力」が育ってきていることを嬉しく思います。

少子高齢化の話題は多くの場面で見聞きしますが、お隣の韓国は日本よりも深刻な状況にあります。韓国の出生率は0.72です。これはどういうことかということ、100人の男性と100人の女性が結婚して生まれる子どもの数が72人ということです。日本も「対岸の火事」では済みません。今は辛うじて1以上をキープしていますが、30年後には1億人割れ、100年後には江戸時代並みの人口になる試算もあります。そうなるとただ人口が減ったでは済まなくなります。国の労働生産力は落ち、国民は（良いか悪いかは別にして）今のようなサービスは受けられなくなるでしょう。労働生産力を回復させるために外国人労働者の雇用に力を入れても、今のような円安が続けば、ジャパンマネーは過去の産物に成り下がり、日本で稼ごうという外国人はいなくなるでしょう。他にも温暖化が進み、UAEのドバイの洪水、パキスタンでは国土の3分の1が浸水したりしています。未知の感染症の流行もあります。世界は大きなターニングポイントを迎えていると言えると思います。

このように社会だけでなく、世界が大きく変化していこうとしています。それなのに教育はいまだに過去のままです。そもそも教育は「社会に出る準備」として捉えられるものです。言い換えれば「動乱の時代を生き抜く準備」と捉えられると思います。先人をロールモデルとすることも過去のデータも通用しなくなるでしょう、何せ「予測不能の時代」なのですから。そう考えると、教育から子どもたちが身につけてはいけないのは「簡単に諦めないタフさ」であり、「想定外に対応する適応力」であり、「自ら考え、人を巻き込むスキルを兼ね備えた主体性」そして「多様な人々を包摂するコミュニティー」といった「非認知能力」だと言えると思います。こういった力の育ちは一見、ある程度大きくなってからと考えられる方もいるかもしれませんが、小中学校等で起こる「不登校」や「学級崩壊」逆に小中学校で発揮されるリーダーシップ等の「非認知能力」、これらのいずれも、そのベースになるのは就学前にどのように過ごすかではないかと思えます。

日本は長らく、物質的にも豊かであり、便利で、快適で、安全で、大きな不自由なく生きていける社会でした。海外に出れば、「日本=豊かな国」とされてきました。しかしそんな時代も終わろうとしています。誰もが目を向けたくないことだと思えますが、そろそろ我々大人一人一人がこの現実に真剣に向き合っていないといけないと思えます。6月は「保育参加」もスタートし、「子育て講演会・給食試食会」もごさいます。一人でも多くのご参加をお待ちしております。